



湊町は住太夫師の十八番

六世 竹本 土佐 太夫

世話物語りとして近來ます／＼、聞熟した土佐太夫師は、文樂座一月興行には「戀飛脚」の封印切を語つて天下無敵の好評を博し、次いで又二月興行に於ては「壽連理の松」を演じて靈妙至絶の神技を示されたので、記者は師に就いて湊町に對する感想談を叩いたところ、師は概ね左の如く談られた（記者）

此の「壽連理の松」湊町の段といふは、詳しい事は知りませんが、何んでも文政元年豐竹磯太夫の門人吾太夫こと通稱大手といふ人が江戸に下り、同二年の冬歸阪、翌三年正月二日から博勞町稻荷境内の文樂座へ出勤して、二代目時太夫を襲名した其の改名披露として語つたのが、好評であつた所から流行り出したといふ事です。其時の前狂言は「妹背山」で、時太夫は序切の中と切狂言の湊町を語つたのです。三味線は鶴澤勝造です。

お夏清十郎の狂言は近松の作もあり、歌舞伎にも昔しは澤山出来てゐましたが、今まで残つてゐるのはありません。マア此の湊町位のものです。近世では太郎助橋の師匠、即ち盲

人の四代目住太夫師が上手に語られて、十八番にしてゐられました。全く此の人によつて湊町は世に出たのです。

明治十八年であつたと想ひます。文樂座一座が東京猿若町の古い小屋へ往つて興行した事がありました。其時は人形も太夫も大家揃で、二代目越路太夫（後に攝津大掾）初代呂太夫、先代津太夫の外に太郎助橋の師匠や六代目綱太夫の高弟、織太夫なども交つてをり、人形は初代玉造、先代紋十郎、初代玉助などが何れも一騎當千の使ひ盛りでありました。三味線も松葉屋廣助、其他當時の腕ツこきが揃つてゐました。けれども其の時分には東京では、人形淨瑠璃がトンと人氣を呼ぶず、三四回も藝題を取かへて興行したのが、皆失敗に終りました。そこで間もなく人形連は力を落して歸つて來ましたが、太

夫は津太夫、呂太夫の外は二派に別れて、東京中の寄席を巡業致しました。一派は越路太夫、路太夫、多門太夫、常子太夫（三代目越路）などの二見一黨、他は住太夫を眞打として、谷太夫（後に染太夫）以下の若手連でありました。越路師匠は十八番の中將姫が一番もてはやされ、住太夫師は湊町が一本槍とな

つたのです。即ち越路の中將姫と、住太夫の湊町とはどちらがよいかといふ所に、天狗連の評判が集中されたといふ事です。此時の住太夫師の三味線は今の道八などの師匠に當る鶴澤勝七といふ人でありました。音色もよし、おとなしい藝で、氣品の高い住太夫師の藝には最適の人でありました。東京で住太夫師の湊町が當つたものだから、大阪へ歸られてからも師に就て之を學ぶ人が多かつたのです。

御靈の文樂座では法善寺の師匠(先代津太夫)も語りましたが、アノ聲柄には無理です。どうしても太郎助橋の様な聲柄でないといふとハンナリと行きません。

堀江座では明治四十年九月五月初日で、私が湊町を勤めました。前が春子太夫の尼ヶ崎、中が大隅師の合邦、切が私の湊町で三味線は市次郎、即ち唯今の吉兵衛です。此時仙左衛門が二代目團平になつたのです。

御靈文樂座で私の語りましたのは、大正十四年三月五日の初日で、前が津太夫の鮎屋、其次へ私の湊町を挟んで、切が千本の道行でした。此時私は伊達太夫から土佐太夫になつた後です。

誰が語つても、サワリを半分省いてしまひます。サワリが二つならんでゐるやうだから、半分しか語らぬのですが、其の省いてある後のサワリが中々よいのです。其の文句はお夏は顔をふり上げて、お主とは何事ぞ、お前は假の手代分、勿體ながら人目があれば、清十郎どうしや斯う仕やと

心に拜んでいふてゐた、まだ其様な心の隔て、とい様の腹立を、思へばとうから死なねばならぬ、そこを振捨て斯うした憂目も、苦にならぬとはどうした事ぞ、お醫者様でも神様でも、惚れた病ひはなほりやせぬ、めをとになるがイヤならば、お前の手にかけて殺してと、絶り歎くぞわりなけれ。といふのです。此のサワリは皆繁太夫節に成つてゐるので、すから、前の「吾妻からげのかいしよなく」のサワリの節とはすつかり違ふて、何ともいへぬ味ひが浮きます。前のは唯かうして來たと清十郎に訴へる丈ですが、後のは眞情を訴へるサワリです。人によつては此のサワリを皆語ると、あまり執拗いといふのですが、語り方によつてはちつとも執拗い事はありません。却つて幾多の情趣をそへて艶つぽいものになるのです。何しろ戀愛中心の狂言ですから、いつそこつてり艶つぽくした方がよいかとも思ひます。之をしつこいといへば、夕霧のサワリなどは此二倍もあります。

一體此の淨瑠璃はめでたいものに作つてあります「春早々儀縁がよい、一つ打てくれ、ヤアしやんく、モ一つせい、しやんくく」といふ手打があるので延喜商賣の人には此點だけでも喜びます。成程或る一派の人々が非難せらるゝ通り、文章はよくありませんが、筋が判りよいので一般の受がよいのです。今度の興行でも御最負筋の人々から、意外に稱賛を受けました。幾ら金玉の明文でも、筋の判りにくいものや、文句の判らぬものは受けません。假令ば壺阪(十一頁へつゞく)

（第七頁より）の如きも、文章の上から論じたら疵だらけですが、筋が分りよくて文句も判り易い。そして團平師と大隅師とによつて書きおろされ、節附も三味線の手もよくつけてありますから、津々浦々までも大流行にはやつたのです。湊町も文章は拙くても作柄が無理がなく、第一節附が上手に出来てゐますから、うまく語れば當るのです。私はいつも當りますので、作者にも敬意を拂つてゐます。一部の人々の批評などは意に介しません。

お夏清十郎の情事は、お染久松よりも古い丈に何となく典雅なものに思はれます。西鶴の本にもかいてあり、隨筆本にもいろ／＼かいてあります。「戀といふ字を錦紗で縫はせ」とか「向ふ通るは清十郎ぢやないか笠がよう似た編笠が」とか、いろ／＼婀娜な小唄も出来てゐますから、お染久松、八百屋お七などよりも、ズツと雅趣のある情史になつてゐます。お夏の出に「遠山おろし雪風」の處などは、語つてゐるうちに當時の事が偲はれて、おのづから藝に魂が這入つて来るやうです。

（完）